

下の人々によつて、記念の講演會や祝賀の宴も張られ、同時に博士は永く馴染まれた大學の講壇から離れて、悠々自適の生涯を樂しまうと期してゐられた際であつた。然るにかゝる次第で、丁度この頃から總委員會關係の人として、京都側では是非とも博士を煩はさねばならぬ幕が開かれ、折角博士の待望せられた境涯に入られるのを妨げねばならぬことになつたのは、學術の發達を計る大切な事業の爲とはいへ、博士にとつては誠に迷惑のことであつたに相違ない。殊に旁の見る目にもお氣の毒に思はれたのは、かゝる事業につきまとう煩はしい交渉や事務の處理が、博士の平生最も厭つてゐられたところであつたことである。厭はれただけに、巧に切廻せるとは勿論思つてゐられず、巧でないといふと自認せらるればせられる程、あの強い責任感から益々それに念をいれて努力せられる有様で、その心勞に對して、全く同情を禁じ得ぬ次第であつた。

索引事業の取定めと並行して、東西兩京の東方學者有志の間では、東方文化研究所を兩京に設置して中國を中心とする東方文化の研究を進め、學術の進歩に寄與すると共に、中國及世界の學界との間に提携を計ることにしたいとの希望が盛んになり、外務當局との間にも漸次意見の一致を見ることになつた。その研究所は兩京に別々に置くといふのではなく、東方文化學院とでも名づくべき機關を設け、その機關の事業として兩研究所を經營しようとするのであつた。かゝる考案が大體一致を見るに至る迄の間には、外務省と東京京都兩地の有志との間に度々の會合が開かれ、それら案を持ち寄つて協議せられたのであつたが、三者必ずしも意見が常に一致した譯ではなく、小異についても、時にはなか／＼互に譲らない場合もあつたやうである。先づ京都側の意見を取纏めることに一苦勞を経た上に、重ねて東京に於ける折衝に苦心を拂はねばならぬ面倒な役目が、京都側としては獨り狩野博士に全面